
作家

本。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作家

【Nコード】

N6952M

【作者名】

本。

【あらすじ】

あなたの心の中に、《文学少女》が住んでいたりはしませんか？
これは私が私の心に住む《文学少女》な先輩に聞いた、《文学少女》と、とある一人の少年の、小さな小さな物語――。

この作品は二次創作ではありません。

あの人（前書き）

行方不明だったファイルから発掘第三弾。

野村美月先生の？文学少女？シリーズを読んで、私の心の中に《文学少女》に語りかけたところ、彼女は「こんなお話があるのよ」と私に一つの物語を教えてくださいました。これはそんなお話を書き留めたものです。

これは二次創作ではありません。

あの人

「私は光の様な物語を書きたいの」

まだ見ぬ未来に、頬と瞳を輝かせながら、あの方は言った。あま
りにも幸せそうに言うのもだから、何だか面白く無くて、顔を上げ
ずに

「そうですか、頑張ってください」

なんて、棒読みで言った――。

遠野高等学校最上学年生である、天翔^{あまがけ} 怜亜^{れあ}先輩は、何だか不思議な人だった。美人でスタイルも良くて運動神経も抜群に良いのに、所属している部活は文芸部だった。

もうあと一年で高校も卒業だというのに、うんと小さな子供みたいな顔をして、

「私は作家になるのよ」

何て言っている。そんな幼くて、天然で、憎めない人だった。

あの人（後書き）

この小説は二次創作ではありません。

怜亜先輩達は私の可愛い子供たちです。それでも、いやいやこれは二次創作だろ、と思う方がいらっしやいましたら、それはまあ個人の考えの違いなので仕方が無いと思います。

お前いい加減しつけえよ？…すみません！！いや、一応大事な子供達の事なので、はい。

とにかく、誰かが少しでも面白いと思って下されば幸いです。

文芸部（前書き）

何だか設定とかが適当な気がします。なにしろ授業中に書いた作品なので……。その辺は見逃して頂いて、ちよつとでも楽しんで頂けたら幸いです。

文芸部

あかねざわ
「茜沢」

名前を呼ばれた僕は、はい、と返事をして席を立った。黒板の前に立つ。

「この問題は少し難しいが…」

チョークでコツコツ、と音を立てて文字を刻んでいる間に、先生が皆に向かって言う。

「できました」

「おお、そうか」

僕が声を掛けると、先生は笑顔で振り返った。そして、ふむ、と僕の解いた問題の解答を眺めた。するとたちまち顔を綻ばせて、

「正解だ」

と言った。おおー、と歓声上がる。

「流石だな、茜沢」

先生は満足そうに頷くと、問題の解き方説明し始めた。…あんな目立ちたくないんだけどな。

「——は——を——して——」

先生の声が遠い。僕は真面目に授業を受けるフリをして、頭の中でボーっと物語を考えていた。

授業が終わると、たちまちクラスの皆に囲まれた。

「スツゲエな、茜沢。何であんな問題解けんだよ」

一人の男子生徒が口を開く。

「あー、家で毎日、勉強してるから」

「へー。でもやっぱ、元からっていうのもあんじゃね？俺の友達で、毎日五時間勉強してるヤツいんだけど、そいつもあれは難しくてなかなか解けないって。それを、あんなにスラスラ解いてたし」

「そう、なの、かな…」

大分嘘を吐いた。本当は毎日勉強なんてしてない。五時間も勉強してる人がいるなんて、正直言つて、驚いた。

遠野高等学校は、全国的に見てかなりレベルの高い学校だ。日本で一、二位を争う程の有名な進学校なのだ。実は僕はそんな学校に、首席で合格していたりする。

「やっぱり、たまたまじゃないかな？」

頬を掻きながら、僕は言った。

「でもやつぱり、空君そらで凄いよね。運動神経抜群だし、頭も凄く良いし、茜沢あかねさわ空そらって名前も凄く綺麗だしっ」

…名前は関係無いんじゃないかな。

「これで、顔が良かったら完璧なんだけどねー」

誰かがボソツと呟いたのが聞こえた。

「コラーお前ら席つけー。授業始めるぞー」

いつの間にか鐘が鳴っていたらしい。皆そそくさと自分の席に戻って行った。

放課後、部活動の時間になった。僕が所属している文芸部には部屋が無いので、図書室へと向かう。

「茜沢君てさ、惜しいよね。運動神経も頭も性格も良いのに、あの眼鏡は――」

教室を出る時にちらりとそんな言葉が耳に入った。

別に僕は目が悪いワケじゃ無い。けど、眼鏡を掛けている。伊達眼鏡だ。周りから見たら、漫画みたいな瓶底眼鏡で、僕は相当目が悪いと思われるだろう。けど、僕の方から見たら、ただのガラスを通して物を見ているのと同じ状態だ。おしゃれとは程遠いこん

な伊達眼鏡を、何故僕は掛けているのか。それは、どうにかして顔を隠す為だった。

図書室の扉を開く。

「待ち飽きたわよ、空君」

怜亜先輩の声が耳に触れた。

怜亜先輩の家はケーキ屋だ。お母さんがとんでもないケーキ好きで、怜亜先輩の名前も、特に好きだというレアチーズケーキから取ったのだという。そのせいか、怜亜先輩からはいつも甘い香りがする。

「別に、待つてくれなんて頼んだ覚えはありません」

言いながら、僕は伊達眼鏡を外す。怜亜先輩の前でだけ、僕は常に眼鏡を外して過ごす。眼鏡と一緒に、僕は《性格の良い優しい空君》も外して、怜亜先輩に対してはほとんど毒舌になってしまう。

「酷いわ、空君。私が空君のことを待つているのは知っているくせに」

怜亜先輩は頬を僅かに赤くして言った。怒っているのだろう。

「知りません。待つている、なんて聞いた覚えがありません」

僕は素っ気なく言った。

文芸部（後書き）

怜亜先輩が不思議な人なら空君も十分不思議な子。

文学少女の先輩って、優し過ぎるせいで後輩にからかわれたりして、「もっと先輩を敬いなさい！」っていつも言っているイメージがあります。

…私だけでしょうか？

小説

「ライトノベルも面白いし、文学作品も面白いわ」

怜亜先輩が目を細めて言う。

「文学作品はやっぱり流石、といった感じで、守られてきた面白さがあるし、ライトノベルは会話が可愛くて優しくて、さくさく読めてしまうの」

頬を紅潮させたまま、怜亜先輩は顔を上げて僕の方を見た。

「ライトノベルは邪道だ、何ていう人もいるけれど、私はそうは思わないわ。だって、その物語にはその物語の、一番の伝え方があるでしょう?」

怜亜先輩がそんな風に、文学作品とライトノベルについて熱く語っている間に、僕はただひたすらに、愛用のシャープペンを動かして、文字を刻み続けていた。

ルーズリーフが黒く染まっていく。

「ねえ、空君。『月と夜の物語』の続き、書けた?」

怜亜先輩が可愛らしく首を傾げて言った。

「五ページ程。怜亜先輩こそ、『夕日の空に沈む海』の続き書いたんですか?」

「ええ。短編だから、もう完結したわ」

文芸部に所属している僕と怜亜先輩の主な活動は、ルーズリーフに物語を綴ることだった。たまに小説大賞に応募したりもする。

「じゃあ、読ませて下さいよ」

「駄目よ。だって少しでも長く『月と夜の物語』を読みたいもの。私の小説を読んでいる間は、空君は小説を書くことが出来ないでしょう?」

「何ですか、そのとんでもなく自分中心な考え方は」

僕はため息を吐きながら言った。怜亜先輩は、「だって空君の書く小説好きなんだもの」とか何とか僕以外の男の人が見たら一目惚れしそうな綺麗な笑顔で言っている。

怜亜先輩が僕の小説を楽しみにしているように、僕だって怜亜先輩の小説を読むのを楽しみにしているのだ。——口が裂けても言わないけど。

「ねえ、空君。出来ている五ページ、先に読んでしまっても良い?」

まるで新品の玩具を前に手が出せない子供の様に、もし効果音を付けるとしたら、『ウズウズ』といった感じで怜亜先輩が僕に言う。

「どうぞ」

「わあっ。ありがとう!」

大喜びする怜亜先輩を横目に見ながら、この人の精神年齢は幼稚園児並なんだろうな、と思った。

サラリ、と僅かに音を残して、最近僕が書いていた小説、『月と夜の物語』が終わった。

「怜亜先輩、終わりましたよ」

僕のリングファイルにはさんである小説ついひたすらに集中して読んでいる怜亜先輩に声を掛けた。

「はい」

顔を上げずに、怜亜先輩が言う。相変わらず凄い集中力だな、なんて思っただけだと、いきなりバツと顔を上げた。

「空君、早くつ早く次のページをちょうだいっ」

右手を僕につきつけ、焦った様に怜亜先輩は言った。

「はい」

僕は急かされるまま、怜亜先輩の手の上に書き上げたばかりの数ページを乗せる。

「ありがとう！」

さつきまで「早く早く」と僕を急かしていた口が、にっこりと三日月形になり、直ぐにルーズリーフに綴られた言葉の集まりへと目を落とす。

「先輩、『夕日の空に沈む海』こっちに寄越して下さい。暇なんで」

僕が言うつと、怜亜先輩はせかせかと自分のリングファイルを取り出した。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

渡された小説を、僕は読み始めた。

怜亜先輩が、口癖の様に言っている言葉がある。

「私は光の様な物語を書きたいの」

嬉しそうに顔を綻ばせて、道端に咲く美しい花の様に、ひっそりと笑う。

怜亜先輩は光の様な物語を書きたい、と言うが、僕は怜亜先輩は今と同じ様に、水の様な物語を書くのが合っていると思う。怜亜先輩が綴る言葉の羅列は、まるで清い水のように、心の中にまで深く入り込み、したたかに奥の方を突く。清浄で花の様な良い香りが微かに鼻をかすめ、思わず心が躍ってしまうような優しさと安らかさが

あるというのに、したたかに、したたかに、心を打つのだ。不意に突かれた心は、悶え、苦しみ、そして徐々に晴れていく。やがて読み終える頃には、妙に晴れ晴れとした気持ちになり、どうしようもない清さに体を沈められているのだ。

パタツ、と音を立てて、怜亜先輩のリングファイルを閉じた。

「お帰りなさい、空君。どうだったかしら？」

僕の正面の席に座っていた怜亜先輩が、僕に向かっていった。怜亜先輩は、小説を読み終えた時、必ず「お帰り」と言うのだ。物語の世界から帰って来た証、と言って、笑いながら。

「面白かった、です」

俯いて言うと、怜亜先輩は頬を桃色に染めて目を細め、そうと言った。

「空君の小説も、面白かったわ。凄く。…光、みたいだった」

「怜亜先輩の小説は、水みたいでした」

僕が言うと、怜亜先輩はまた、そう、とだけ返してきた。

「ねえ、空君。小説大賞に応募しましょうか」

不意に、怜亜先輩が綺麗な笑顔でそう言った。

「別に良いですけど、何で急に？」

「今回の結構自信作なのよ？もしかしたらひっかかるかも知れないわ」

「そうですか、頑張ってください」

「何他人事みたいに言ってるの、空君。君も頑張るのよ！」

怜亜先輩に言われ、僕はしぶしぶ頷いた。

「分かりました。頑張ります。…面倒臭いけど」

「空君！」

「分かりましたって。ちゃんとやりますよ」

「よろしい」

腕を組んでうむうむと頷く怜亜先輩は、何だか少しハムスターみたいに見えた。

小説（後書き）

怜亜先輩も空君も可愛いです。自慢の子供達です！（笑）
親馬鹿な自分乙ですね。

皆さんにも好きになってもらえると嬉しいです。

僕は（前書き）

ページ配分が良く分からない。

僕は

小説を応募するのには、時間がかかる。普段はルーズリーフに小説を書いているから、パソコンで打ち直すか、原稿用紙に書き直すかしなければいけないし、細部の調整もある。

「正直、面倒臭いんだけどなあ……」

僕は別に怜亜先輩みたいに、将来は作家になりたい、とか思っていない。ただ、本を読むのは好きだし、自分で小説を書くのも好きだった。だから文芸部に入ったのだが、部員が部長である怜亜先輩と僕の二人だけ、というのは正直言って驚いた。最低人数二人ギリギリで成り立っていた文芸部は、前の部長の三年生が抜けて正に崖っぷちだったらしい。僕は初対面の時、怜亜先輩に手を握られ、

「君は文芸部の救世主よ、希望よ」

と言われた。ピョコピョコとび跳ねながら、嬉しそうに言うものだから、僕は頭を下げて、

「よろしくお願いします」

と言ったのだった。

でも別に、作家になりたかったワケでもない。なれるのならなし、なれないならならない。流れに逆らわず、身を任せてしまおうと思っている。要するに、特に夢とか、無いのだ。

「さっさと仕上げよう……」

「空君、小説を出しに行きましょう」

三日前に原稿が出来上がっていたから僕は、はい、とだけ返事を
して怜亜先輩の後を追った。

ポストの前まで来ると、怜亜先輩はパン、と両手を合わせた。

「ほら、空君もやるのよ」

ほらほら、と言われて、僕も手を合わせる。

「「どうか、入賞しますように」」

僕と怜亜先輩の声が重なり、碧い空に吸い込まれていった。

「大変よ、空君！」

怜亜先輩が珍しく慌てた様子でパタパタと僕の所まで走って来た。
どうやらシューズを忘れて来たらしく、スリッパだった。

「どうしたんですか？またどっかの図書館の本二年間位借りっぱなし
だったんですか？」

僕の問いに、怜亜先輩が頬を膨らませる。

「そんな事しません！」

腰に手を当て、唇を突き出して言う。

「何言ってるんですか、今まで二度もあったでしょう。その度に、一緒に謝りに行って、とか言って無理矢理連れて行ったでしょう」

「うう…。さ、三度目の正直なもの」

「二度あることは三度あるっても言っんですよ」

僕がため息と吐きながら言うと、怜亜先輩はまた、うう、と呟いて、拗ねてしまった。

「空君の意地悪っ」

「僕は基本的には温厚な人間なんですよ。怜亜先輩が悪いんです。変な事するから」

「私がいつ、変な事をしたって言うの？」

「何言ってるんですか。あなたの行動全てが変なんですよ」

「酷いわ、もつと先輩を敬いなさい。女の子みたいな綺麗な顔して、口が悪いんだから」

僕は慌てて怜亜先輩の口を塞いだ。

「…っ…！」

今だに何かモゴモゴと言っているが、気にせず辺りを見回す。良かった。ほとんど人が居ない様だ。

「——っ！…っっ！」

怜亜先輩がペシペシと僕の腕を叩く。どうやら口と一緒に鼻まで塞いでしまった様だ。

「すみません」

ゆっくりと手を離す。

「ひ、酷っ…ハアー、ハアー、酷い、わ」

息も絶え絶えに、怜亜先輩が言う。余程苦しかったようだ。

「すみません」

拗ねられても困るので、素直に頭を下げる。

「でも、あーゆー事は、なるべく言わないで下さい」

怜亜先輩が首を傾げる。

「あーゆー事って？」

「だから、顔が綺麗とか何とか…」

「どうして言っではいけないの？」

「——つ、とにかく、お願いします」

「……。分かったわ。…あ、そうだ、最初の目的をすっかり忘れてしまっていたわ」

怜亜先輩がぽん、と手を打つ。

「何ですか？」

「あのね、空君の、作家デビューが、決まったのよ」

「…え？」

嬉しそうに手を合わせる怜亜先輩を見ながら、僕の頭の中は白く、染まっていった。まるで、頭の中に雪が降ってきたかのよう
に。

僕は（後書き）

ラストスパート入ります！！
頑張って完結まで書ききりますよ。

作家（前書き）

最終話です。やっぱり授業中クオリティです。

作家

初めて僕の小説を読んだ時、怜亜先輩は確かに泣いていた。

「空君。君の書く小説は、君の創る物語は、まるで光の様よ。この世界を、きっと、君はたくさんの人に届けなくちゃいけないわ」

涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、それでも幸せそうに笑って怜亜先輩は言った。

今だってそうだ。ずっと作家になりたかったのは、僕じゃ無くて怜亜先輩の方なのに。それなのに、怜亜先輩は本当に嬉しそうに笑う。

「どう、して、…ですか」

気付くと口から言葉が発せられていた。どうして？何で？何で、貴女は――…。

「意地悪な事っ、いっぱい言ったのにつ…」

「優しいところも、ちゃんと知っているわ」

「先輩の事っ、敬って無いのにつ…」

「空君は口で言うより、行動で示してくれているじゃない」

「…っ、作家につ、なりたかったのはっ、怜亜先輩の方なのにつ…」

「…そうね。でも、空君もなりたかったでしょう？だって、小説を書いている時の空君は、本当に幸せそうだったもの」

怜亜先輩の優しい声が、粉雪の様に僕の心に降り積もる。

僕が作家になりたかった？小説を書いている時の僕は、幸せそうだった？そんなの僕は知らない。けど、物語を書き終えた時の、あの何とも言えぬ安らかな、澄んだ気持ち、それが真実である事を、蝶々の様にヒラリヒラリと舞い降りて来て告げる。

「…それに、いずれ私も作家になって、次々にヒット作を出すんだから。だから、ねえ、空君。君に何があったのかは知らないけれども、自分に嘘を、吐かないで？気付かないフリして、見捨てて行かないで？空君の事が分かるのは、空君だけなんだから」

怜亜先輩の力強い声が、僕を震えさせる。ああ、そうか。この人は僕の事を良く知ってるんだな。だから僕は、怜亜先輩の前では本音を出せるんだ。

「分かって、ますよ…」

微笑んで、言った――。

僕は中学の頃、酷いイジメに遭っていた。学校中の男子から。あれは、結局のところ、ただの妬みだったと思う。

僕は一時期、モデルの仕事をしていた。自分で言うのも何だけど、

勉強は昔から出来た。問題を見ると、答えが頭に浮かぶのだ。今まで、必死になって勉強をした事は、一度も、無い。順位はいつも一という数字だった。

運動神経も、多分良い方。いくつかの賞を受賞した。バレンタインに貰ったチョコレートの数も、ファンの女の子の分も合わせると凄い事になった。

だから男子の方は、僕が気に入らなかったんだと思う。イジメに遭ったのはごく僅かな期間だった。けれど、内容が酷かった。今でも、ふとした事で思い出すと、吐き気がする。

だから僕は顔を隠した。人と接する事を極力避けていた。だけど、怜亜先輩に出会ってしまった。僕の外じゃ無くて、内を見て、それでも好きだと言ってくれる怜亜先輩に。

翌日、僕は眼鏡を掛けずに学校に登校した。

「ねえ、モデルのソラがウチの学校に来てるんだって!」

「え!? 嘘、何で?」

「分かんないけど、ウチの制服着てたって友達が言ってた!」

「それって転校して来たって事!?!」

廊下で、教室で、階段で、色とりどりの声が飛び交う。僕は教室の扉に手を掛け、一気に引き開けた。

「おはよう」

キヤー、と、女子が黄色い声を出し、男子が口をぱっかり開けて棒立ちする。

「ななななな、何で、ソラが…？」

男子の一人が僕を指差し、言う。

「何でって、言われてもな…」

僕は困って頭を掻く。どうしよう？正直に言っても信じてくれないさそうだ。僕が考えあぐねていると、教室の扉からひょっこり、と怜亜先輩が顔を出した。

「いたいた、空君。緊急の連絡があるのよ」

ひよこひよこ僕の前まで歩いて来る。

「すみません。何ですか？」

「ええと、そう。お母さんから連絡が来たのよ、空君のお母さんから。それでね、やっぱり受賞の電話が、空君が居なかった時にきていて、すっかり言い忘れていたんですって」

「何で家の母親と怜亜先輩の仲、そんなに良いんですか!？」

「あら、取り次いで貰う時に、少しずつお話をして、少しずつ仲良くなったのよ」

「何ですか、それ！」

怜亜先輩と話していると、固まっていたクラスメイトの一人が僕を指差した。

「ま、まさかつ、茜沢、空…？」

「ああ、うん、そうだよ」

微笑んで即答すると、教室中に叫び声が響いた。

「伊達眼鏡掛けてたんだ。前に行ってた中学校でイジメに遭って、顔を隠してた。けどやっぱり、自分を隠すのはおかしい、って思ってた。だから、また、よろしく願います」

クラスメイト達に向かって、僕は頭を下げた。自分の気持ちに嘘を吐かずに、正直に。

「では、街の人にインタビューをしてみましよう。すみませーん」

置かれたテレビから、元気なアナウンサーの声が零れる。

「え？好きな作家ですか？…うーん」

声を掛けられた女性は、考え込むような仕草をしてから、直ぐに顔を上げた。

「茜沢空と、天翔怜亜ですね。言葉の使い方が綺麗で――」

『空君、私も作家になったのよ』

『そうですか、おめでとございます』

『もつつ冷たいのね』

『そうじゃありませんよ』

『じゃあ何だって言うの？』

『だって』

信じてましたから。

作家（後書き）

これにて完結です。

ここにきて何を書いたら良いのか分からない罷。なんてこつたい。

二人は作家としての道を始めます。それは平坦な道では無いのでしょう。しかし、それは彼らが自分で選んだ嘘偽りの無い道なのです。だからきつと、最高の笑顔で物語を創り続けていけると思います。

最後に、少しでも面白いと思って下さった方が居れば、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6952m/>

作家

2011年11月15日15時09分発行